

令和7年度(2025 年度)

病害虫発生予察情報 第 16 号

8月予報

北海道病害虫防除所 令和7年(2025 年)7月 25 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshoh/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

季節予報（付記）によれば、8月の天気は数日の周期で変わり、気温は高い確率が50%、降水量は多い確率が40%と予報されています。

これまでの発生状況と季節予報から、多めの発生が予想される病害虫は、水稻のヒメトビウンカ、アカヒゲホソカスミカメ、とうもろこしのアワノメイガ、オオタバコガ、大豆のマメシクイガ、大豆・小豆の食葉性鱗翅目幼虫、てんさいの褐斑病、ヨトウガ、たまねぎのネギアザミウマ、あぶらな科野菜の軟腐病、モンシロチョウ、コナガ、ヨトウガ、りんごのハマキムシ類、モモシクイガです。

なお、防除対策の詳細を紹介した「北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」は北海道病害虫防除所のホームページ（<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshoh/>）で公開しています。

8月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想		注意事項及び防除対策
		発生期	発生量	
水稻	葉いもち病 穂いもち病	既発（早） やや早	並 並	薬剤防除の適期実施に留意する。葉いもちの発生が多く出穂期間が長引く場合には、追加防除を実施する。
水稻	アカヒゲホソミドリカスミカメ	既発（やや早）	多	薬剤防除の適期実施に留意する。水田内の発生密度をモニタリングし、追加防除の要否判定を行う。
ばれいしょ	疫病	遅	やや少	茎葉の疫病に効果があっても塊茎腐敗に効果がない薬剤があるので注意する。
てんさい	褐斑病	既発（早）	多	複数の薬剤に対して、耐性菌の発生が認められているため、薬剤の選択には特に注意する。散布間隔が開きすぎないように注意する。
たまねぎ、 その他野菜類	ネギアザミウマ	—	やや多	抵抗性個体群が確認されているためピレスロイド剤の使用を避ける。 たまねぎ以外の野菜類（ねぎ、あぶらな科野菜、アスパラガスなど）でも多発に注意し、薬剤防除を実施する。
あぶらな科野菜	コナガ	—	多	ジアミド剤に対する抵抗性個体群の発生が確認されているので、防除にあたっては薬剤の選択に注意し、効果確認に努める。

A. 水稻

いもち病（葉いもち）	発生期：既発（早）	発生量：並
（穂いもち）	発生期：やや早	発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) いもち病は弱い雨が長期間続いた場合や、寡照によって水稻の抵抗力が低下すると多発しやすい。発病適温は20～25℃であり、最低気温16℃以上で発病の危険がある。
- (2) 予察田における葉いもちの初発期は、「きらら397」の北斗市では6月30日（平年：7月10日）と平年より早く、「ななつぼし」の比布町では6月30日（平年：7月13日）、同じく岩見沢市では7月10日（平年：7月19日）と平年より早かった。
- (3) 予察田における7月4半旬時点での葉いもちの発病度は、「ななつぼし」の岩見沢市では平年より低く、同じく比布町では平年並、「きらら397」の北斗市では平年より高かった。
- (4) 7月3半旬の一般田における巡回調査では、葉いもちの発生は確認されていない。
- (5) 近年のいもち病発生面積率は低く推移しており、伝染源は多くないと推定される。
- (6) 水稻の生育は平年より早く推移している。
- (7) 葉いもち発生予測システム「BLASTAM」によると、7月1半旬と3半旬に感染好適条件となった日が全道的に出現した。
- (8) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (9) 以上のことから、穂いもちの発生期は平年よりやや早く、葉いもち及び穂いもちの発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 穂いもち防除は出穂期の1回散布を基本とするが、葉いもちの発生が多く出穂期間が長引く場合には、散布間隔を1週間程度として穂が完全に揃うまで散布を継続する。
- (2) 長期間の弱い雨により多発することがあるので注意する。
- (3) QoI剤を茎葉散布する場合には、耐性菌発生リスクを低減するため防除ガイドに準拠して使用する。

ウンカ類（ヒメトビウンカ第2回）	発生期：既発（早）	発生量：多
（セジロウンカ）	発生期：やや早	発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカは高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。セジロウンカは道内で越冬できず、大陸や本州以南から飛来して、8月中旬以降の飛来成虫は水田への定着率が低いとされている。
- (2) 畦畔すくい取りによるヒメトビウンカ第1回成虫の捕獲数は、比布町で平年並、北斗市で平年よりやや少なく、長沼町では平年より少なかった。
- (3) 予察灯によるヒメトビウンカ第2回成虫の初誘殺日は、長沼町で6月26日（平年：7月10日）、比布町では6月30日（平年：7月6日）と平年より早かった。
- (4) 予察田すくい取りによるヒメトビウンカ第2回成虫の捕獲数は、比布町で平年より多く、長沼町で平年よりやや多く、北斗市で平年並に推移している。予察灯による誘殺数は、長沼町及び比布町で平年より多く推移している。
- (5) 予察灯によるセジロウンカの誘殺は、長沼町（平年：7月30日）、比布町（平年：7月31日）いずれも認められていない。
- (6) 予察田すくい取りによるセジロウンカの初捕獲は、北斗市で7月1半旬（平年：7月3半旬）と平年より早かった。長沼町（平年：8月1半旬）及び比布町（平年：8月2半旬）では捕獲は認められていない。
- (7) 予察田すくい取りによるセジロウンカの捕獲数は、北斗市で平年よりやや少なく推移している。
- (8) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (9) 以上のことから、ヒメトビウンカ第2回の発生量は平年より多く、セジロウンカの発生期はやや早く、発生量はやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 多発による被害が予想される水田では、防除ガイドに準拠し、カメムシとの同時防除を実施する。
- (2) ヒメトビウンカの吸汁害が発生するのは、7月下旬以降の第2回成虫発生時に株当たり寄生頭数が50頭（20回振りすくい取り換算頭数で成虫1,800頭または幼虫900頭）以上の激発となった場合である。

アカヒゲホソミドリカスミカメ（第2回）

発生期：既発（やや早）

発生量：多

＜7月18日付け注意報第6号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。高温条件では、成虫の水田への侵入活動や稲穂への加害活動が活発化する。
- (2) 畦畔すくい取りによる第2回成虫の初捕獲は、北斗市で7月18日（平年：7月23日）と平年よりやや早く、比布町で7月16日（平年：7月18日）、長沼町では7月14日（平年：7月13日）と平年並であった。予察田のフェロモントラップにおける第2回成虫の初捕獲は、比布町で7月8日（平年：7月15日）と平年より早く、長沼町で7月9日（平年：7月12日）、北斗市で7月7日（平年：7月11日）と平年よりやや早かった。
- (3) 予察田すくい取りによる成虫捕獲数は、長沼町及び比布町で平年より多く推移している。北斗市では捕獲は認められていない。
- (4) 予察田のフェロモントラップ調査における成虫捕獲数は、長沼町及び比布町で平年より多く、北斗市では平年並に推移している。
- (5) 7月3半旬の一般田における巡回調査では、72地点のうち、畦畔すくい取り調査での第2回成虫捕獲頭数において多発生の目安となる23頭を超えた地点は空知、留萌地方の3地点であった。
- (6) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (7) 以上のことから、水田内における発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 基幹防除
 - ① 茎葉散布は出穂期とその7日後の2回を基幹防除として実施する。
 - ② ジノテフラン剤、エチプロール剤、スルホキサフロル剤、フルピリミン剤を使用する場合、基幹防除を出穂期7～10日後の1回散布に省略できる。
 - ③ 水面施用を実施する場合は、出穂期から7日後までに処理する。
- (2) 追加防除は、薬剤の使用時期や回数など使用基準を遵守し、以下のとおり実施する。
 - ① 散布予定日の2～3日前に水田内すくい取り調査（20回振り）を行い、割粃の少ない「きたくりん」及び「吟風」では3頭、「ゆめぴりか」で2頭、「ななつぼし」では1頭に達した場合に追加防除を実施する。その後も同様の調査を行い、上記水準を下回るまで順次7～10日間隔で追加防除を継続する。
 - ② 水面施用を実施した場合には、出穂3週目にモニタリングを行い、上記に準じて追加防除を実施する。
- (3) 加害期間は水稻の黄熟期までであり、その後の防除は不要である。

フタオビコヤガ（第3回）

発生期：やや早

発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による第2回成虫の誘殺は、長沼町（平年：7月9日）、比布町（平年：7月4日）ともに認められていない。
- (3) 予察田における第2回幼虫の被害は、長沼町で平年よりやや多かった。比布町では被害は認められていない。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、第3回幼虫の発生期は平年よりやや早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 10株について幼虫被害を調査し被害葉率が、7月下旬に65%、8月下旬に100%に、それぞれに達していなければ防除は不要である。

B. とうもろこし

アワノメイガ

発生量：多

＜6月27日付け注意報第3号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) フェロモントラップにおける第1回成虫初発日は、北斗市で6月4日（平年：6月3日）と平年並であった。
- (2) フェロモントラップによる第1回成虫誘殺数は、北斗市で平年より多かった。
- (3) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 発生には地域差があるので、当該地域における近年の発生状況を考慮して防除要否を判断する。
- (2) 8、9月どり生食用とうもろこしでは第1回幼虫を対象に、7月上中旬に10日間隔で2回の茎葉散布を基本とするが、収穫前に第2回の発生が認められる場合は成虫発生盛期に薬剤散布を実施する。

オオタバコガ 発生量：多

＜6月20日付け注意報第2号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は道外から成虫が飛来し、幼虫がとうもろこし雌穂に食入し子実を食害する。
- (2) 予察ほにおけるフェロモントラップの誘殺数は、長沼町及び比布町では平年より多く、北斗市で平年並に推移している。訓子府町では誘殺が認められていない。
- (3) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 生食用とうもろこしでは、絹糸抽出揃い以降、1～2回薬剤防除を実施する。
- (2) 防除にあたっては他害虫の発生に注意し効率的な防除に努め、同一系統の薬剤の連用を避ける。フルベンジアミド剤、エマメクチン安息香酸塩剤、レピメクチン剤及びクロラントラニリプロール剤は室内試験で効果が高いことが確認されている。

C. 豆類

べと病（大豆） 発生期：やや遅 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) べと病は多雨や多湿時、密植や過繁茂で風通しが悪いときに多発する。
- (2) 予察ほ（長沼町）の「トヨムスメ」では初発を認めていない（平年：7月21日）。
- (3) 大豆の生育は平年より早く推移し、草丈は長く、葉数は多い。
- (4) 7月20日までの天候経過では、気温は平年より高く、降水量は平年より少なかった。
- (5) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生期は平年よりやや遅く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 黒大豆及び抵抗性が“弱”の黄大豆、青大豆品種では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。それ以外の品種では防除の必要はない。
- (2) 要防除水準は、開花始の上位葉の病斑面積率で2.5%（1小葉当たりの病斑個数約30個）である。

菌核病 発生期：遅 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 菌核病は花卉感染が主体であり、開花期の日照が少なく多湿な場合に多発する。また、茎葉によって地表面がうっべいされるほど子のう盤の形成が良好となる。
- (2) 予察ほ（芽室町）の菜豆「大正金時」では初発を認めていない（平年：7月18日）。
- (3) 小豆及び菜豆の生育は平年より早く推移し、草丈は長く、葉数はやや多いから多い。
- (4) 7月20日までの天候経過では、気温は平年より高く、降水量は平年より少なかった。また、日照時間は平年を上回った。
- (5) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生期は平年より遅く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 開花時期に注意し、薬剤散布にあたっては、大豆では開花始から10～15日後、小豆では7～10日後、菜豆では5～7日後に1回目の散布を行い、その後必要に応じて、10日間隔で計2～3回散布する。

灰色かび病（小豆・菜豆） 発生期：遅 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 灰色かび病は開花期以降の天候が低温で多湿な場合に多発する。また、過繁茂状態は本病の進展を助長する。

- (2) 予察ほにおける初発期は長沼町の小豆「しゅまり」（平年：8月2日）、芽室町の菜豆「大正金時」（平年：7月18日）ともに認められていない。
- (3) 小豆及び菜豆の生育は平年より早く推移し、草丈は長く、葉数はやや多いから多い。
- (4) 7月20日までの天候経過では、気温は平年より高く、降水量は平年より少なかった。
- (5) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、小豆、菜豆ともに発生期は平年より遅く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤の散布時期、散布間隔、散布回数は菌核病に準ずる。
- (2) 耐性菌の出現を防ぐため、ローテーション散布を行う。
- (3) チオファネートメチル剤、フルアジナム剤及びジカルボキシミド系剤に対する耐性菌が認められているので、防除ガイドに準拠して適切な薬剤防除を実施する。

茎疫病（大豆・小豆）	発生量：やや少
-------------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 茎疫病は土壌が湿潤な条件で発生し、比較的気温が高い場合に多発する。なお、7月中旬以前に発病すると被害が大きくなる。
- (2) 7月20日までの天候経過では、気温は平年より高く、降水量は平年より少なかった。
- (3) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 転換畑や排水性の不良なほ場では排水対策を講じる。
- (2) 発病前から予防的に薬剤散布する。発病後に薬剤散布しても効果がないので、気象情報により大雨が予想された場合はその前に散布する。

マメシンクイガ(大豆)	発生期：早	発生量：多
--------------------	--------------	--------------

＜7月25日付け注意報第8号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおけるフェロモントラップによる初誘殺日は、長沼町で7月6日（平年：7月19日）、比布町で6月29日（平年：7月15日）、芽室町では7月18日（平年：7月25日）、訓子府町で7月17日（平年：8月2日）と平年より早かった。北斗市（平年：8月3日）では誘殺は認められていない。
- (2) フェロモントラップによる成虫誘殺数は、長沼町及び比布町で平年より多く、芽室町及び訓子府町で平年よりやや多く推移している。
- (3) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年より早く、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆の莢の生育及びフェロモントラップによる成虫初発を観察し、薬剤の散布開始時期を決めることで効果的に防除できる。成虫の発生が既に確認されている場合、莢の長さが2cmに達した6日後をめどにピレスロイド剤を散布する。さらにその10日後に有機リン系剤を散布する。

食葉性鱗翅目幼虫（大豆・小豆）	発生量：やや多
------------------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおける食葉性鱗翅目幼虫による被害程度は、大豆では訓子府町で平年より高く、長沼町で平年並、小豆では訓子府町で平年より高く、長沼町で平年よりやや高く推移している。
- (2) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆は開花期から莢伸長期に葉が被害されると最も収量に影響する。この時期の食害葉面積率が20%に達すると約5%の減収となる。
- (2) 大豆では、要防除水準（大豆1個体当たりの幼虫頭数が開花期頃に2頭、莢伸長期以降に3頭）を超える場合には、防除ガイドに準拠して薬剤散布する。

D. ばれいしょ

疫病	発生期：遅	発生量：やや少
-----------	--------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 疫病は18～20℃が最適温度とされており、曇雨天が続くとまん延する。
- (2) 予察ほの初発期は、長沼町（平年：「とうや」7月18日、「スノーマーチ」7月19日）、北斗市（平年：「とうや」7月6日）、芽室町（「とうや」7月13日、「スノーマーチ」7月15日）及び訓子府町（「とうや」7月13日、「スノーマーチ」7月15日）で初発を認めていない。
- (3) 7月3半旬の一般ほにおける巡回調査では、66地点中3地点（上川及び釧路地方）で発生が確認されている。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生期は平年より遅く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を継続する。
- (2) 本病の発生ほでは、収穫期の気温が低めに推移すると、疫病菌による塊茎腐敗が発生しやすいので注意する。茎葉の疫病に効果があっても、塊茎腐敗に効果がない薬剤があるので注意する。
- (3) メタラキシル剤には全道で広く耐性菌が認められているので、薬剤の選択には注意する。

アブラムシ類	発生量：並
---------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほにおけるジャガイモヒゲナガアブラムシの発生量は、長沼町で平年並、訓子府町で平年より少なく推移している。
- (2) 予察ほにおけるモモアカアブラムシの発生は、長沼町、訓子府町ともに認められていない。
- (3) ワタアブラムシの発生量は、長沼町及び訓子府町では平年より少なく推移している。
- (4) 7月3半旬の一般ほにおける巡回調査では、66地点のうち、胆振、渡島、檜山、オホーツク、十勝及び根室地方の合計12地点で寄生が確認されている。
- (5) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を実施する。
- (2) アブラムシの種類によって薬剤の効果が異なるので注意する。
- (3) ワタアブラムシは下位葉に好んで寄生するので、薬液が十分にかかるよう散布する。

E. てんさい

褐斑病	発生期：既発（早）	発生量：多
------------	------------------	--------------

＜7月1日付け注意報第4号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 褐斑病は高温多雨条件で多発する。
- (2) 予察ほにおける抵抗性“やや強”品種「ライエン」の初発は、長沼町で6月25日（平年：7月9日）及び訓子府町で6月30日（平年：7月10日）と平年より早く、芽室町で7月2日（平年：7月3日）と平年並であった。
- (3) 予察ほの7月4半旬における発生量は芽室町で平年よりやや少なく、長沼町及び訓子府町では平年並である。
- (4) 7月3半旬の巡回調査では、全72調査地点のうち空知、胆振、上川、オホーツク、十勝地方の24地点で発生が確認されている。
- (5) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 抵抗性“強”以上品種の散布間隔は、マンゼブ剤では14日間隔、銅水和剤および硫酸銅水和剤では7日間隔とする。散布は8月6半旬から9月1半旬まで継続し、最終散布はマンゼブ水和剤とする。
- (2) 抵抗性“やや強”以下品種の散布間隔は、マンゼブ剤を14日間隔、高温多湿条件となった場合は10日以下とする。8月下旬で散布を終了すると、その後の発病が急激に進展する場合が多い。
- (3) DMI剤（ジフェノコナゾール、テブコナゾール、フェンブコナゾール、テトラコナゾール）及びカスガマイシン剤耐性菌が全道各地で発生しているため、混合剤も含めこれら系統薬剤の使用回数を可能な限り低減する。

- (4) Q o I 剤耐性菌の発生が広範囲に確認されているため、褐斑病に対する防除薬剤として、Q o I 剤（アゾキシストロビン、トリフロキシストロビン）は使用しない。
なお、根腐病及び葉腐病に対するQ o I 剤の使用回数は、登録の範囲内とする。
- (5) チオファネートメチル剤に対する耐性菌が全道で発生しているため、薬剤の選択に注意する。
- (6) 本病に特に罹病しやすい品種が栽培されている地域では本病の発生推移に注意する。

ヨトウガ(第2回)	発生期：並	発生量：やや多
-----------	-------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は第1回幼虫時期に高温で経過すると夏季休眠の状態になり蛹期間が長くなる個体が発生する。
- (2) 予察ほのてんさいにおける第1回産卵の初発期は、長沼町で平年より遅かった。芽室町及び訓子府町では産卵が認められていない。
- (3) 予察ほのてんさいにおける第1回産卵の卵塊数は、長沼町で平年より少なかった。
- (4) 予察ほのてんさいにおける第1回幼虫による被害程度は、訓子府で平年より高く、芽室町で平年よりやや高く、長沼町で平年並に推移している。
- (5) 7月3半旬の一般ほにおける巡回調査では、73地点のうち被害株率50%を上回ったのは上川、オホーツク地方の7地点であった。
- (6) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (7) 以上のことから、第2回幼虫の発生期は平年並、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 被害株率が50%に達したときを防除時期の目安とする。薬剤散布以降も被害が進展するときは追加防除を検討する。幼虫に対する薬剤の効果は令期が進むにつれて低下するので、散布適期を逸しないよう注意する。
- (2) 産卵期にベンゾイル尿素剤を使用することにより、高い防除効果が得られる。第2回幼虫を対象とする場合の散布時期は7月下旬頃から8月中旬頃である。
- (3) 第1回幼虫期に高温で経過し、第2回成虫の産卵が長引く可能性があるため、ほ場を観察し、幼虫による加害が長引く場合は追加防除を検討する。

F. たまねぎ

ネギアザミウマ	発生量：やや多
---------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察ほにおける成虫の発生量は、長沼町で平年並、訓子府町で平年より多く、幼虫の発生量は、長沼町で平年より少なく、訓子府町で平年より多く推移している。被害程度は長沼町、訓子府町ともに平年よりやや高く推移している。
- (3) 7月3半旬の一般ほにおける巡回調査では、40地点のうち、空知、上川、オホーツク及び十勝地方の合計10地点において寄生株率50%を上回った。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 道内の広い範囲でピレスロイド剤抵抗性個体群が確認されているため、本系統薬剤の使用を避ける。

たまねぎのりん茎被害を防ぐための ネギハモグリバエ重点防除時期は8月上旬です

ネギハモグリバエは、たまねぎほ場において7月下旬から8月下旬に3回目成虫が発生します。
りん茎への被害を抑制するには、8月上旬に2回の薬剤散布（シアントラニリプロール剤、チオシクラム剤）が有効です。

詳しくは北海道立総合研究機構農業研究本部ホームページの試験研究成果をご覧ください。

平成30年「たまねぎのネギハモグリバエの発生生態及び防除対策」

PDF

パンフ



G. あぶらな科野菜

軟腐病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は、高温多雨条件で発生が多くなる。
- (2) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 多室素栽培を避ける。
- (2) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (3) だいこんでは、播種25～30日後に1回目の薬剤散布を実施する。
- (4) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。また、オキシロニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。

モンシロチョウ 発生量：多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのキャベツにおける第2回幼虫数は、長沼町で平年より多かった。
- (2) 7月3半旬の一般ほにおける巡回調査では、16地点中1地点で本種による加害が認められた。
- (3) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛来及び産卵の多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

コナガ 発生量：多

＜5月13日付け注意報第1号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのフェロモントラップにおける誘殺数は、比布町、北斗市及び訓子府町で平年より多く、長沼町で平年並に推移している。
- (2) 予察ほのキャベツにおける幼虫の発生量は、長沼町で平年より多く推移している。
- (3) 7月3半旬の一般ほにおける巡回調査では、16地点中9地点で本種による加害が認められた。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤抵抗性の発達しやすい害虫であり、近年道内においてもジアミド剤に対する抵抗性遺伝子の保持個体が確認されている。そのため、防除を行う際は以下の点に留意する。
 - ① セル苗灌注処理を行った場合は、ほ場での防除効果の確認に努める。
 - ② 防除効果が低いと判断された場合は、早めに他系統薬剤による茎葉散布を実施する。
 - ③ 同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション防除を実施する。
 - ④ ジアミド系薬剤感受性低下を予防するため、本系統を含む薬剤を6月に使用した場合は30日間、7月の場合は25日間、8月に使用した場合は道東地域で30日、その他の地域で25日間は本系統の薬剤を使用しない。（「ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したキャベツにおけるコナガの防除対策」（令和5年指導参考事項）を参照。）
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生に注意し、効率的な防除に努める。

ヨトウガ(第2回) 発生期：並 発生量：やや多
--

てんさいのヨトウガの項を参照。

H. りんご

黒星病 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は平均気温 15～20℃で降雨が多い場合に多発する。
- (2) 予察園での発生量は、長沼町（無防除）の「相伝ふじ」（早生ふじ系）では平年並に推移している。余市町B（慣行防除）の「昂林」では発生を認めていない。
- (3) 7月3半旬の一般園における巡回調査では発生は認められていない。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、薬剤散布を継続する。特に葉に発病が認められている場合は、果実への感染を防ぐため、十分量の薬液を丁寧に散布する。
- (2) 散布間隔の開きすぎに注意する。
- (3) 散布水量が不足した場合や、防除機の切り返し地点で発生した事例が認められたことから、薬剤散布は十分な水量で散布ムラのないよう丁寧に実施する。
- (4) チオファネートメチル剤、QoI 剤及びDMI 剤耐性菌の発生が全道で広く認められていることから、薬剤の選択に注意をするとともに、これらの薬剤以外においても同一系統薬剤の連用は避ける。

斑点落葉病 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は夏期の高湿多湿条件で多発しやすい。
- (2) 予察園での発生量は、長沼町（無防除）の「王林」では平年より少なく推移している。余市町B（慣行防除）の「昂林」では発生を認めていない。
- (3) 7月3半旬の一般園における巡回調査では、全5調査地点のうち胆振及び渡島地方の2地点で発生が確認されている。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、黒星病等との効率的な防除に対応し、薬剤散布を継続する。
- (2) 「王林」やデリシャス系等の感受性品種を栽培している場合には発生に注意し、適切な防除を行う。

ハマキムシ類 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップによるハマキムシ類の第1回誘殺数は、リンゴコカクモンハマキは、余市町A及びB（慣行防除）で平年並、長沼町（無防除）で平年より少なかった。リンゴモンハマキは、長沼町で平年より多く、余市町Aで平年より少なかった。余市町Bでは誘殺が認められていない。

- (2) 一般園のフェロモントラップによるリンゴコカクモンハマキの誘殺数は、石狩市及び七飯町で平年より多く、岩見沢市、札幌市、壮瞥町及び増毛町では平年並であった。リンゴモンハマキの誘殺数は、岩見沢市、石狩市及び七飯町で平年より多く、札幌市で平年よりやや多く、増毛町で平年並、壮瞥町では平年よりやや少なかった。
- (3) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量はやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

モモシンクイガ	発生量：多
----------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町（無防除）、余市町A及びB（慣行防除）で平年より多く推移している。
- (2) 一般園のフェロモントラップによる誘殺数は、岩見沢市、札幌市、壮瞥町及び増毛町で平年より多く、七飯町で平年よりやや多く推移している。
- (3) 長沼町の予察園において、産卵開始期は6月25日（平年：7月1日）、被害初発期は6月25日（平年：7月10日）といずれも平年より早かった。
- (4) 長沼町の予察園で、産卵数は平年より多く、被害果率は平年より高く推移している。
- (5) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

ハダニ類	発生量：並
-------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ハダニ類は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察園でのハダニ類の発生は、長沼町（無防除）、余市町A及びB（慣行防除）いずれの地点においても認められていない。
- (3) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 高温乾燥条件が続くときには発生状況に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。
- (2) 同一系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性の発達が急速に進むので、防除ガイドに準拠して適正な防除を行う。

キンモンホソガ	発生量：やや少
----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、余市町A（慣行防除）で平年より多く、長沼町（無防除）及び余市町B（慣行防除）では平年より少なく推移している。
- (2) 被害は、長沼町で平年よりやや低く推移している。
- (3) 一般園のフェロモントラップ調査における誘殺数は、岩見沢市で平年より多く、七飯町で平年よりやや多く、札幌市、石狩市、壮瞥町及び増毛町では平年より少なく推移している。
- (4) 8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

付記

北海道地方 3か月予報 (8月から10月までの天候見通し)

令和7年7月22日
札幌管区気象台 発表

<予想される向こう3か月の気候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

8月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は高い確率が50%です。

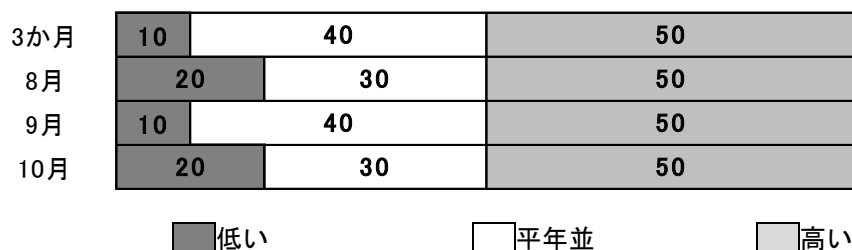
9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は高い確率が50%です。

10月 北海道日本海側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。北海道オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

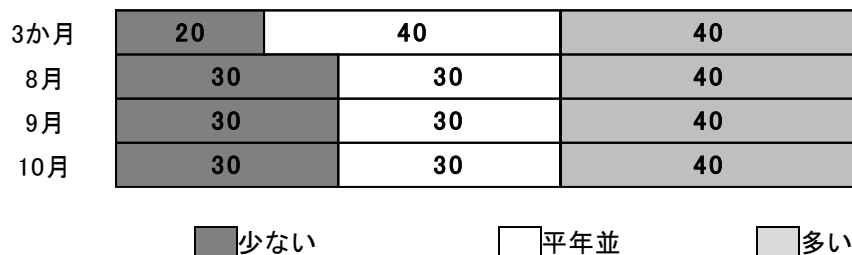
<<気温>>

[北海道地方]



<<降水量>>

[北海道地方]



令和 7 年

6月1日～8月31日は**農薬危害防止運動**実施期間です！

北海道では、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬を使用する機会が増える6月から8月を期間として、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理等を推進する「**農薬危害防止運動**」を実施します。



https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/

令和7年度農薬危害防止運動

農薬の適正使用 農林水産省 検索

北海道

令和7年6月1日～8月31日

★ 農薬情報の掲載サイト

農薬の登録情報や農薬取締法などについては、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」をご覧ください。

URL <https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

北海道農政部生産振興局技術普及課
(TEL 011-231-4111 (内線) 27-838)
北海道病害虫防除所
(TEL 0123-89-2080)
各総合振興局・振興局農務課